

家庭科教育

いま家庭科ができることは何か

—さらなる問いと実践を重ねて—

増 渕 哲 子

分科会冒頭、共同研究者の伊槻氏より基調提案があり、実施を間近に控えた新学習指導要領の性格分析と問題点の指摘が行われた。子どもの生活現実に取り添った家庭科実践の重要性を共有しつつ、レポート発表に移った。

今年度は七本のレポートが提出され、食・衣・住・福祉に関わる実践や問題提起が行われた。以下、レポートの記述内容を中心に、口頭報告、参加者の発言等を織り交ぜ紹介していく。

一 「食」に関わる実践

1 「生産者との調理実習」

せたな町立瀬棚中学校 才門砂江子

中学生が生産者と共に調理実習に取り組みめざらしい実践である。瀬棚では「ふれあい市場」という地元生産者による農産物、海産物等の産直活動がある。このメンバーでもある米、卵、ベーコン、大豆、チーズの生産者が材料を提供し、班に分かれて調理実習にも参加する。

生産者との調理実習は、サークルで聞いた「自分で育てたり作ったりした食べ物は大事にする」という言葉がきっかけであった。瀬棚中学校では食べ物を育てる活動は少ない。給食に嫌いな物が出れば生徒はそれだけをきれいに寄せて残す。どこで食べ物を大切にすることに気付かせられるだろう、実際に作った人と一から作る調理実習をしてみてはどうだろうか…。

さて、作ったのはバターと米粉入り豆乳スコーンである。ペットボトルに入れた生クリームを振って作るバターは塩味も好みで決める。プレーン味のスコーンの基本材料は米粉、卵、豆乳である。別種スコーンにはさらにベーコンと

チーズが入る。ここで使われた豆乳も、前日から水につけておいた大豆をこの場で搾りとったものである。中学生は、手塩にかけて育てた生産者の傍らで、生産者の声を聞きながら実習に取り組んでいく。作業の間には「プロッコリーは……」などと、農産物の生育の話を聞く。豆腐、納豆、味噌、醤油は大豆製品とわかっていても、枝豆やきな粉には驚く中学生の姿も見られる。

参加者全員でおいしく味わったあとは質問コーナーとなる。生徒から生産者への質問は、仕事の大変さや生きがいについてである。「食べた人においしかったよと言われると嬉しい。生きがいをを感じる」という話、育てた黒豚を業者で解体してもらい、それを生活の糧とし「命を頂いている」という話、食べ物ひとつ一つに生産者の思いが詰まっていることを中学生は感じ取っていたとの報告だった。

参加者からは、地元漁師とおこなったそば作りで中学生の発した「うめーっ」という声、そば作り職人の実演に期せずしてあがった高校生の「ほー」という声など、これまでの北海道家庭科実践のひとつも紹介された。地域の人々も実は学校に来たがっている、それなのに学校が閉め出しているという問題はないのかとの声もあった。瀬棚でも農家の子どもはあまり多くはない。生産者と出会い「本物」を体験する授業で子どもがみせる姿には、やはり心に

迫るものがある。実習授業の醍醐味を感じる報告であった。

2 「一年半の取り組みについて」

名寄高等学校 北野 晴美

名寄高校は二〇〇五年に新築した校舎だが、家庭科実習室は食物と被服の兼用である。北野氏も長い教職経験で初めて見たという兼用実習室は、壁側に流し台八セット、中央に被服用机が九台固定された設計になっている。この配置では、実習時には流し台前に三人しか立てず、また教師は作業する生徒の後ろ姿ばかりを見ることがになり安全面の問題が生じる、被服実習兼用の低い机も調理作業に使わざるを得ないが、あまりにも低く高校生は不十分な体勢を強いられる。このような施設・設備問題を抱えた中での、施設・設備管理と実習授業におけるねらいや工夫が報告された。

兼用実習室はあくまでも簡素に整え、必要な時に必要な物だけを置く。毎時間、調理実習の終わりには生徒が床の雑巾がけをする。さらに計五回の調理実習が一通り終わると、A組はガスコンロの分解掃除、B組は食器を再度念入りに洗う……などクラスで分担し大掃除をする。協力していか作業を進めるか、次のクラスのために、また来年入ってくる一年生のためにと、他者の気持ちを想像できる力を実習を通して育てたいとの話があった。

食物、被服の両実習ともに、丁寧に確実に技術を習得させていく実践である。計五回の調理実習では、計量器具の使用法、火加減の確実な調節、切り方を意識する、魚をきれいに食べる、中華鍋の使用と蒸す調理法の習得をそれぞれに食べる、被服実習は半完成品のエプロン教材を使用する。事前に玉結び、玉止め、ミシン縫い、まつり縫い、ボタンつけの練習を行い、その過程では一時間ごとに提出させ赤ペンでのチェックを積み重ね本番実習に応用させる。生徒は調理実習の感想に「中学までは汚い皿でおいしくないものを作って、いいイメージがありませんでしたが、高校のは皿がきれい、机がきれい、調理器具がきれい、とても気分よく作れました」と書いている。調理環境や食べるための環境を整えることも、生徒が獲得する充足感や次への取り組み姿勢を大きく変えることになる。

参加者から注目されたのは、実習後の雑巾がけであった。比較的落ち着いた学校だが、はじめは「するかな？」と思つた。が、やってよかつたとの話に、しかし家庭では掃除の文化は継承されているのだろうか、雑巾にさわらない、雑巾がけをしない生活をしているのでは、これに関連し、洗濯物の干し方を知らない家庭を訪問したことがある、習得が当然視されてきた後始末の「暮らしの文化」が伝わっていない、との話もあつた。生活文化は家庭科学習のキー

ワードだが、どちらかといえばものづくりに関わる生活文化の教材化が想定されることが多いと思われる。生活文化学習の別の一面を指摘した報告でもあつた。

3 「家庭科通信」

札幌白陵高等学校 伊槻久美子

「子どもの貧困」に学校は、教師は何ができるのか。家庭科という教科は、貧困という現実にとどのように迫り、何を生徒に伝えることができるのか。

伊槻氏は昨年度レポート「ザ・一〇〇円朝食」で、次のような自校生徒の実態を明らかにしている。高校二年生は約四割が連日朝食を食べずに登校している。「時々食べない」を加えれば、七割の生徒が食べずに登校する場合があると答えている。逆に言えば、毎日朝食を食べる生徒は三割に過ぎないのである。

常々生徒が紙パックの清涼飲料水を抱え、差し込んだストローを吸う姿が気になつていた。これは、つまりはカローリ摂取の行為であつたのだと納得する。背景には貧困の問題が横たわつている。そもそも家には食べる物が無い。もつとも生徒は、「お母さんが作らない」「なかつた」と、この現状に向き合つているわけではない。小さな頃から朝食を食べてこなかつた生徒も少なくないのである。

以上を背景にした一〇〇円朝食の献立作りと実習が、今年度レポートである。冬休みに「一〇〇円で一汁三菜の朝食をつくる」課題を出す。優秀献立が選ばれ、さらに最優秀となった「卵焼き朝食」が調理実習に採用される。メニューはご飯、ポテトスープ、卵焼き、鶏ささみのわさび和え、しらすおろしである。米は貴い物として、いも一〇円、きやべつ一〇円、卵二〇円、鶏ささみ三〇円、三つ葉一〇円、しらす干し五円、大根一〇円の締めて九五円である。

「鶏ささみのわさび和え」は、①ささみをさつとゆで冷やす、②三つ葉を一口サイズに切る、③わさびを醤油で溶き、④②と和える、という乙な一品である。

実習時、生徒たちは厳粛に箸を運んでいたという。一品だけを多く食べる経験はあるが品数多く食べるという経験がない、汁物をつくることは珍しいというのが日常の食生活である。この一〇〇円朝食では、ご飯を多く食べられることに驚いていたことも報告された。白陵高校では、もう一人の家庭科教員も、卵をメインに「冷蔵庫にある物でつくる実習」を行っているとのことである。

子ども手当の創設や高校無償化への動きが進行しつつある。教育の機会均等の形骸化を正すことは緊急課題である。貧困という生活現実の中で、「当たり前前の生活」が成立しなくなっている。家庭科は、当たり前前に生活できない現実

をどのようにくみとるのだろうか。レポートはそれを問うものだったと思う。現実を抱えて生きる子どもの「気分」を受け止めた教師の対応はまず欠かせない。なにしろ習慣化した空腹状態で昼までの時間を過ごすのだから。その上で一〇〇円朝食は、経済的困難の中にあつて、経済的価値を逆転させてしまう。「一〇〇円でもものスゴくたくさん料理ができた!」「かかっているお金は安くても、おなかいっぱい食べれる」と。一〇〇円の中のやりくりには、何やら愉快な気分も漂うのである。現実はその割り切れるものではないことは事実である。しかしこの実践は、困難を背負う生徒へのエールでもある。

二 「衣」に関わる実践

1 「制服を着てこない学校にきて」

北海道赤平高等学校 内藤しをり

生徒会執行部が自発的に「制服を着よう」と呼びかけをはじめた。執行部が作成した校内掲示ポスターには、次のように書かれている。「パーカーやスエット等、私服と思われるものを着て登校している生徒が目立ちますね。特にスエットは『だらしない』という意見がありました。(中略)

あらかじめ制服登校だと決まっているのに何故私服を着るの？生徒に聞くと『制服は寒いから』という答えが多かったです。けどそれでいいのでしょうか？ほかの高校の生徒はどうですか？別にここは赤高なんだから他の高校とは関係ない、それでは駄目です。それに、赤平市内の住民からどう思われているかというと、『何故高校生が制服で登校していないのか』『おかしい』こう地域の方たちから思われているのです！スエットは恥ずかしいと思つて下さい。』

家庭科授業で制服の現状について自由意見を書いてもらう。Tシャツとジーンズの制服だったらどう思うか、にについては手厳しい意見が多く出る。だらしない、みつともない、不真面目にみえる。特に多いのは高校生らしくない、高校生に見えない、学校ではないようだ、という意見である。一方、別にいいしそっちのほうが楽、いいと思う、楽だ！すぐ遊びに行ける、との意見は肯定ではあるが積極的肯定というわけではない。しかもこれらは少数派である。

服装問題に対する生徒会の自主的取り組みも含んで、生徒自身が衣生活を創造する力を身につけさせたい、とするレポートであるが、内藤氏自身、衣生活の教材として制服が適切とは思えないとも述べている。衣の学習と制服着用の間には矛盾が生じることは、これまでも指摘されてきたところである。

今回のレポートで興味深いのは、制服着用をめぐつて生徒が吐露した「着る意識」であろう。まじめに服装に規律を求めようとする生徒たちの意識にも予想するに様々な背景が伺える。

他校でも制服を否定する生徒は少ない。生徒にとつて制服は着ている限りは高校生でいられる記号、中学生はかわいく着たいと思つているから女子用ズボンを作ったが着用者はあまりいない、ジャージ着用も多くの時だけ制服ということもある、埴輪ルックがほとんどで業者にズボンを作らせたがはかない、価格も高い、などの話が出た。また私服にするとお金がかかる、面倒くさいとも生徒は言う。

参加者から、フィンランドと日本の高校生のやりとりも紹介された。きわめて質素な服装で靴も穴あきのフィンランド高校生が、なぜ日本人は制服を決められねばならないのかと問う。毎朝悩むからと答える日本、なぜ悩むのかと問うフィンランド。このやりとりは興味深い。日本の高校生は服を着る自信がないのか。服装の自由ひとつでも、「自由」を学んできた者とそうでない者との間にはその使いこなし方に差が出て当然だろう。さあ今日から自由だ、と言われても戸惑うばかりかもしれない。制服を切り口に、様々なやりとりが行われた。衣の学習と制服着用の接点について示唆を得ることができたと思う。

2 現状をとらえ直して再構成する

〈 檜山合研 分科会討議より〉
 せたな町立北檜山中学校 日下 恵子

「衣」の学習、とりわけ「縫う」という作業は何を目的とすべきなのか。ボタン付けができない、基礎縫いができない、それでは困るからなのか。今回のレポートは、「こんな使わないしょ」との生徒の反応に端を発した昨年度合研レポート『「衣」から見えてきたもの：伝えたいこと』の続編である。全道合研開催直前の一〇月に行われた檜山合研における分科会討議内容を読み解き、「衣」の学習で、生徒に育てたい力とは何かをさらに追求したレポートである。

檜山合研は、本当にできなくなっている子どもの実態と、「当たり前」は本当に「当たり前」なのか、との問いを共有した場だった。さらにIT能力はあっても「実体験はない」ことを、教師はしっかり認識すべきとしている。

子どもの生活に、体験が圧倒的に不足している点は誰も否定できないだろう。折しも国立教育政策研究所が、中学校技術・家庭科の実技の習得状況に課題ありとの調査結果を公表した。例えばまつり縫いのできたのは四六%だったとのこと。これについて日下氏は、補修を意識した裁縫は

家庭科教師がイメージする「生徒に育てたい力」と重なるのだろうか、と述べている。できなくなっているという事実のうえに組み立てられるべき「衣」の学習の方向をどこに向かわせるべきなのか、その解釈に対する違和感を語っている。

レポートの中には、フィンランドのルイユ織りの紹介記事もあった。非常にダイナミックな作品である。昨年度の教育研究全国集会で印象深く聞いた「フィンランドでは暮らしの中に、デザインすることが日常的に取り入れられている」との言葉をヒントに、「自分の発想をデザインする」という点が大切なのではと考えたこと、それは「こうしたいう」そのため「こう動いてみる」という経験を積み重ねていくことなのかもしれない、Tシャツのフェルトによるデコレーション、リメイク等の教材化が考えられるのでは、と述べている。

「縫う」とこと創造の世界を結ぶこと、そこから生まれる自身の肯定感。「〇〇をしていると心がおさまる」という感情、また満ち足りた気持ち、楽しみ…。「衣」の学習とは何かへの問いかけは続く。

三 「住」に関わる実践

「学校設定科目『住居』の授業実践による

生活科学学習の意義を問い直す」

北海道石狩翔陽高等学校 石川 幸孝

「住居」の授業はなかなかうまくいかない、が生徒に面白さを感じさせたいと教師に思わせる内容だ、との声がある。二〇〇〇年度に普通科から総合学科へ転換、その後に続く諸々の課題の露呈と改革、増大した設定科目の整理・統合を経て、総合学科であるからこそ行われるべき生活科学学習とは何かの問いのもと開設した新科目「住居」について、実践の経過報告が行われた。

石川氏は総合学科の存在意義を「高等学校教育のアンチテーゼとして位置すべきであり、普通科・職業科・専門科のように教育課程を作ることができないからこそ、殊に授業を新たな視点でつくることができる」と述べる。新科目「住居」は、住環境を見る視点を生徒が新たに獲得しながら探求的に考察していくことをねらう。住生活課題認識と考察方法、日本の住宅事情、住宅建設の現実、住宅の間取り、間取りの変化、と進み、ここでは生徒が作成した実際の間

取り図が紹介された。間取り図作成にあたっては、①北海道の平屋住宅、②建て売り物件として売り手の立場で作成、③買手は夫婦と幼児一人の家族、④幼児への配慮、水回り、方角、ドア、動線、風通しに留意、を条件に教科書会社の平面計画シール教材を使用し工夫させる。家族との共有空間を広く設計する者、客間を作る者、収納を重視する者など、枠の中での設計とはいえ生徒が作成した間取り図はそれぞれが個性的である。さまざまな間取りから多様な価値観があることを知ること、さらにある価値観が自分にとってはその適当なものと言えるのか、その判断基準を持たせたいとのことだった。

参加者からは、住居は生活水準の格差が強くあらわれやすい、例えば払い下げの教員住宅に住んでいた生徒は住宅のイメージが浮かんでこなかったという話もあった。一方で住み手の立場に立った展開例として、どんな部屋に住みたいかを具体化させ、ではその家を建てるためにいくらかかるか、老後はこの間取りではどうなるか、とつなげていく実践なども紹介された。

高校家庭科で、「住居」を独立した科目として設定している例は僅少であろう。また数時間で終わるのではなく、一年間を通してじっくりと学べることにも、総合学科独自の魅力を感じた報告であった。

四 「福祉」に関わる実践

「高齢社会と生活課題」

愛知教育大学 青木香保里

教員養成大学で家庭科を専攻する二年生対象の専門科目「家庭科研究」の二回分の講義内容が紹介された。高齢社会における生活課題としての交通問題を論じたものである。日本は一九六〇年代から、クルマに過剰依存するマイカー・モータリゼーション社会に突入した。この結果各地の鉄道やバスなどの公共交通機関の廃止が相次ぎ、多くの「移動制約者」を生み出した。マイカーを頼りに生活している高齢者は運転が困難になると同時にこの「移動制約者」となってしまう。そして日本では、二〇一二年には四人に一人が六五歳以上だと推定されている。以上が一回目の概要である。

二回目は杉田聡著「買物難民」(大月書店、二〇〇八)を取りあげている。「豆腐一つ買うのに、バスやタクシーに乗らなければならぬなんて……」と嘆く宮崎市郊外の七〇代女性の声冒頭に紹介される。高齢者の生活困難を車社会との関わりから問題提起したものである。1980年

代後半より、大規模店・量販店が郊外に出店し始める。過剰なモータリゼーションは、大駐車場を持つ大型店の郊外化を押し進め、地域の商店街は衰退していく。著者の杉田氏は、そうした事態がとりわけ高齢者の生活をどう変えてしまうのかという点にこだわる。人が抵抗なく歩ける距離は四〇〇メートル程度といわれるそうだ。全国で小売店数がピークを迎えた八〇年前後とその二〇年後で渋川市における小売店数と店舗までの距離を比較したところ、二〇年間で店舗数の減少率は七五%、距離は一・九倍の七六一メートルに伸びたという。しかしこれは平均で、地域によっては移動距離が四・五・五倍にもなっている。交通量のきわめて多い車道の端を、高齢女性が買い物袋を両手に下げとぼとぼと歩いている。疲れて道路脇に座り込んでいる姿もある。このような買い物帰りの写真が何枚も掲載されているが、こうした高齢者の姿には胸を衝かれる思いがする。一体わたしたちは、高齢者をこのように扱う社会をよとしていいのか。

毎回の講義では必ず映像をセットにし、今回は「温かいスープを召し上がれ」という欧州の共同食堂のドキュメンタリーを視聴させたとのことである。何らかの解決の方向性、できないことではないというメッセージを伝えたいとの話があった。

道内でもいくつかの「買い物難民」を守る動きがある。赤平ではコープさっぽろがオープンし、無料送迎バスが走るようになった。病院前に停留所をつくり、移動手段のない高齢者が、病院のついでに買い物できるようにした。コンビニとの提携でバンを走らせている地域もあるとのことだ。

この講義は、学生が三年に進んだ時、教材研究に生かすために設定されたとのことである。自己責任論がかまびすしいが、家庭科から問題提起できることはまだまだありそうだ。

今年度レポートの特徴は、「家庭科では何を教えるのか」という問いがより鮮明に出されたことにある。子どもたちの現実から、家庭科は何をくみとりどのような方向に授業を発展させていくのか、悩みつつも展望が語られた、興味の尽きない分科会であった。

さて、今年度は新学習指導要領対応の小学校教科書検定が、そして来年は中学校教科書検定が行われる。「改正」教育基本法のもとで発行される初めての教科書の行方も、別の意味で興味の尽きない対象である。注視していきたい。

(北海道教育大学札幌校)